バカとテストと召喚獣～僕の家族は幽霊！？～

松竹梅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカとテストと召喚獣～僕の家族は幽霊！？～

【Ｎコード】
Ｎ３１７１Ｚ

【作者名】
松竹梅

【あらすじ】
これは、ある幽霊の少女とひとりの少年の物語。バカテスの第二作です。楽しく読んでいって下さい

プロローグ（前書き）

こんにちは、松竹梅です

バカテスの二作目になりますが、

楽しく読んでいって下さい

プロローグ

いつも…

いつも私はひとりぼっち…

誰にも気づかれることもなく時間が過ぎていく…

春がきて、夏がきて、秋がきて、冬がきて…

季節が永遠に続いていく…

時々、私に気づいてくれる人もいた…

だけど…

だけど、ある人はそれきり学校に来なくなった…

噂ではそのまま転校したみたい…

また、ある人は狂ったかのように逃げていった…

噂ではそのまま隔離病院に入ったみたい…

私はひとりぼっち…

わたしは…

いやだ…

いやだいやだ…

いやだイヤだ嫌だいやだ嫌だいやだＩＹＡＤＡイヤだｉｙａｄａ嫌だイヤダイヤダいやだ嫌だＩＹＡＤＡイヤダイヤだ嫌だいやだイヤだ嫌だいやだ嫌だいやだＩＹＡＤＡイヤだｉｙａｄａ嫌だイヤダイ

ヤダいやだ嫌だＩＹＡＤＡイヤダイヤだ嫌だいやだイヤだ嫌だいやだ嫌だいやだＩＹＡＤＡイヤだｉｙａｄａ嫌だイヤダイヤダいやだ嫌だＩＹＡＤＡイヤダイヤだ嫌だいやだイヤだ嫌だいやだＩＹＡＤＡイヤだｉｙａｄａ嫌だイヤダいやだイヤだ嫌だいやだイヤだ嫌だいやだＩＹＡＤＡイヤダイヤだ嫌だいやだイヤだ嫌だいやだＩＹＡＤＡイヤだｉｙａｄａ嫌だイヤダイヤだ嫌だいやだイヤだ嫌だいやだＩＹＡＤＡイヤだｉｙａｄａ嫌だイヤダイヤだ嫌だいやだイヤだ嫌だいやだＩＹＡＤＡイヤだｉｙａｄａ嫌だイヤダイヤだ嫌だいやだイヤだ嫌だいやだＩＹＡＤＡイヤだｉｙａｄａ嫌だイヤダイヤだ嫌だいやだイヤだ嫌だいやだＩＹＡＤＡイヤだｉｙａｄａ嫌だイヤダイヤだ嫌だ！

もう…

もう、ひとりはイヤ！

誰か…

誰か気づいて！

私は…

私は此処にいるのに……

「ねぇ、キミ、そんなところで何しているの？」

《え？》

《わ、私が見えるの？》

「なに言ってるのさ。此処にはキミしかいないじゃないか」

あぁ、私の正体を知らないのね…

《私はね、幽霊なんだよ？》

「ははは、冗談はやめてよ」

《ほら、これを見て》

「え？……」

ほら、私が壁をすり抜けるところを見せたら固まっちゃった…

この後は、いつものように逃げていくんだろうな…

そして…

そして、私はまた…

また…

ひとりぼっちになるのね…

「……す…」

「すご～～～い！」

《え？》

「すごいよ！僕、幽霊見るの初めてだよ！」

《お、驚かないの？》

「なにが？」

《私、幽霊だよ？》

「幽霊だからどうしたの？」

《え？》

私はさっきから驚いてばかりである

「そうだ！」

「ねぇ、僕とお友達にならない？」

《!?》

今この子はなんて言った?

お友達?

私と?

《お、お友達になってくれるの?》

「うん♪僕は吉井(よしい)　明久(あきひさ)って言うんだ」

「キミの名前は?」

私?

私の、名前…

《わからない…》

「え？」

《私、自分が誰なのかは分からないの…》

本当…

私は何者なんだろう…

「ん～～、そうだ！僕が名前を付けてあげるよ」

《え？》

「そうだな……吉井（よしい）　幽乃（ゆうの）、なんてどうかな？」

《吉井……幽乃……》

私の…

私の名前…

《ふぇっ、》

「え？」

《うえぇ～～～～～ん！！》

「え！？なんで泣き出すの！そんなに気に入らなかった？」

《ち、違うの》

「？」

《わ、私、ずっと……ずっと、ひとりぼっちだったの……》

「……」

《私を見た人は、みんな……みんな逃げていった。

中には仲良くしてくれた人もいたけど……結局はみんな私のことを忘れていった……》

「……」

《ひとりじゃないと思うと……私……私、うれしくて……》

ギュウッ

《!?》

「大丈夫……今度から僕がキミの家族になってあげるから」

《……家族……》

「だから、今はおもいかっきり泣いていいよ?」

《……明久》

「なに?」

《明久……あ、き久…あきひ…う、ふぇ、うえぇ～～～～～ん》

こうして、私に新しい家族が出来ました

プロローグ（後書き）

次はいよいよ本編です

～キャラ紹介？～

名前：吉井　幽乃

性別：女

種族：幽霊

身長：推定１６０ｃｍ

体重：幽霊だからありません♪

容姿：幽霊なので肌は青白いが、黒髪をおかっぱ頭にし、瞳の色は黒い

好きなもの（こと）：明久・友達・ぬいぐるみ

嫌いなもの（こと）：明久と友達をいじめ、傷つける人（島田＋ＦＦ団）・塩

服装：基本的にセーラー服姿（明久達が調べたところ昔の旧校舎の制服であることが判明）だが

時々どうやっているのか、ナース服や巫女服を着ることがある

備考：明久が一年のときに旧校舎の屋上で会い、名前を付けてそのまま家族になる

いつもぬいぐるみに憑いており、周りには最新型のぬいぐるみ型ロ

ボットと言って誤魔化している

幽乃の正体に気付いているのは明久、瑞希、翔子、西村教諭、学園長だけである

～キャラ紹介？～（後書き）

次からはいよいよ本編です

では、お楽しみに♪

第一話（前書き）

お気づきの人もいると思いますが、
幽乃のセリフは《》で書いていきます。

第一話

《……懐かしい夢だな…》

朝日が射し込むリビングで私は目を覚ました。

《明久を起こさなきゃ……》

私は飛びながら明久の寝室に向かった。
なぜ、飛べるかって？
私、吉井　幽乃は幽霊だからだよ。
ん？幽霊なのに寝るのはおかしい？
余計なお世話だね♪

《明久～朝だよ～》

寝室の壁をすり抜けて、明久の体を揺すった。
なんで明久に触れるかというと、どうやら明久は霊感が強く、触れることも出来るんだそうだ。
これは学園長から聞いたんだけど……なんでそんなこと知ってるんだろ？

「ん、幽乃？」

《おはよう明久、もう朝だよ？》

「そうだね、なら、着替えるから出てくれる？」

《わかった♪》

私が部屋の外に出て、少し経つと明久が制服姿で現れた。
そして、朝食をすませると明久は学校へ行く準備をした。

「じゃあ、幽乃？」

《分かったよ♪》

私は明久が持っているテディベアの中に入った。
実は私、学校では最新型のロボットってことになってるんだ。
他にもぬいぐるみがあるけど、一番のお気に入りは白猫のぬいぐるみかな？
だって、明久からの最初のプレゼントだもん♪

「それじゃあ行こうか？」

《うん♪》

こうして、私たちは学校に向かった。

「おはようございます。鉄じ……西村先生」

《おはようございます。西村先生》

「おはよう吉井兄妹。それと吉井兄、今、鉄人と言わなかったか？」

「ははっ、気のせいですよ」

「ん？そうか」

この肌が黒く筋骨隆々の人は、補習担当の西村　宗一先生だ。
私が気に入っている先生の1人なんだ。
だって、私の正体を知っても逃げたりしないで変わらずに接してくれるんだから。
ちなみに鉄人っていうのは、西村先生のあだ名でトライアスロンが趣味ってところからついたみたい。
あと、なんで兄妹かというと、周りからは最近できたロボット＋女の子＝妹っていう式が出来ているみたい。

「ほら、クラス分けのだ」

そう言うと西村先生は明久に封筒を渡した。

「何処なのか分かっていますけどね」

「しかし、一年の後半から成績が上がり始めて、一年の終わりにはAクラスも取れるところにまできていたのに残念だったな」

《気にしないで下さい。あれは、明久が決めたことなんですから》

「そうか、まぁ、頑張るように」

「《は～い！》」

私と明久は返事をして教室に向かった。
向かっている最中に明久は封筒を破いて中の紙を取り出して見た。

吉井　明久　　Ｆクラス

今年も楽しくなりそうだな♪

第二話

「ねぇ、時間まだあるから、Ａクラスでも見ていこう」

《うん、いいよ》

ＨＲが始まる前に私と明久はＡクラスに向かった。

「すごいね……」

Ａクラスを見た明久の言葉に私は頷いた。
まぁ、私は何度も見てるけどね。
でも、流石にこれはやりすぎじゃないかな？
何処かの高級ホテルを思わせる装飾ばかりだよ。
あ、Ａクラスに入った子が気絶しちゃった。

「Ａクラスがこれだとｆクラスはどんなんだろうね」

《さ、さぁ……》

言えない……ｆクラスの教室は知ってるけど言えない！

「うん、帰ろう」

《明久！帰っちゃダメだよ》

「いやだ！こんなオンボロ小屋が教室なわけがない！はっ！そうか、これは夢だ。夢なんだ！」

《明久！現実逃避しないで！》

「……なに漫才やってるんだ？」

《あ、雄二くん！》

話しかけてきたのは、明久の親友（明久は悪友って言ってたな）の坂本　雄二くんです。

「雄二、おはよう」

「それでどうしたんだ？」

《あまりの教室のひどさに明久が現実逃避してたんだよ…》

「確かにひどいな……」

雄二くんも苦笑してたよ。

今度、カヲルさんに言ってみよ。

カヲルさん、学園長だからね。

「皆さん、おはようございます。このクラスの担任になる、福原慎です。」

時間は経ち、ＨＲが始まりました。

「それでは廊下側の人からは自己紹介をして下さい」

「木下　秀吉じゃ。演劇部に入っておる」

あ、秀吉くん。
とても、綺麗な顔立ちです♪
女の子みたいですね。
え？女の子じゃないのかって？
だって……

「言っておくが、ワシは男じゃ！」

そう男の子なんですよね。

「……土屋　康太」

つぎは康太くんです。
割と去年のクラスメイトがたくさんいますね。

「～～～です。海外育ちで、日本語は会話はできるけど読み書きが苦手です。あっ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので、趣味は……」

あれ？女の子もいたんですね。
誰なんで、

「吉井明久を殴ることです☆」

……要注意です。
明久の友達の中で要注意人物の島田　美波さんです。
明久に暴力を振るうこと数々、何度か驚かして（幽霊的な意味で♪）やりましたが、
まだ懲りてないみたいですね……
ほら、明久が震え出しました。

「え～」

明久の番ですね♪

「吉井　明久です。気軽に『ダーリン』と呼んでください」

ち、ちょっと／／／
いきなりなにを言い出すの！？／／／

『『ダァーーリィーーン！！』』

……気持ち悪いです。
明久も気持ち悪いのか顔色が青くなってますね。

よし、ここは

《次は私だよ♪》

私が空気をかえよう！

《ロボットの吉井　幽乃です。学生じゃありませんが仲良くして下さい。気軽に『ユノちゃん』って呼んでね♪》

『『ユノちゃ～～ん！！』』

《はーい♪》

『『かぁ～わい～～い！』』

さっきよりは空気が和みましたね。

「ありがとう幽乃」

《大丈夫だよ。だ、ダーリン／／／／》

きゃ、言っちゃった♪

ガラッ！！

「す、すみ、ません。遅れ、てしま、いました」

『『『『え？』』』』

いきなり教室に女の子が入ってきました。
あれって……

《瑞希？》

そこには私の親友、姫路　瑞希さんがいました。

第三話

なんで瑞希がいるんでしょうか？
Ａクラスほどの実力があるのに？
あ、確か体調を崩して途中退席したんでした。
明久もその付き添いで途中退席になり、無得点扱いでＦクラスになったんでしたね。
私はその事を帰ってきた明久から聞きました。

「こ、今年一年よりょ……よろしくお願いします／／／」

噛みましたね…
真っ赤になりながら瑞希がこっちに来ました。

「緊張しました～」

「瑞希ちゃ」

「姫j」

《み～ずき～♪》

？二人も瑞希に話しかけようとしたような、気のせいですね♪

「え？幽乃ちゃん？」

「おはよう、瑞希ちゃん」

「あ、明久くん！／／／」

あらあら今頃、気付いたんだ。

「明久がブサイクですまんな」

「そ、そんな！えっーと…」

「代表の坂本　雄二だ」

「あ、よろしくお願いし……それより！明久くんはブサイクじゃありません！目もパッチリしてて顔のラインも細くて綺麗だし……そのむしろ……」

そうそう明久は顔は整ってる方だよね。
それより瑞希？今近くに明久がいること忘れてない？

「まぁ、悪くはないな。……そういや興味がある奴もいたな」

「え？誰？」

「そ、それって誰ですか！？」

瑞希がすごい慌てようだよ。

「確か……久保…」

久保さんですか？
でも、この学年にいる久保って……

「……利光だったかな」

……新情報です。
これは警戒しないといけませんね…
今、言われたことに明久がショックを受けていますよ。

バンバン

「はいはい、そこの人たち静かに」

バキッ！

ガラガラ！

「「「……」」」

……ひどいです。
先生も軽く叩いたんでしょう。
いきなりのことにみんな固まってしまいました。

「え～替えを用意してきますので、自習をしててください」

先生が教室を出て行ってしまいました。

「雄二、ちょっといい？」

「あ？どうした？」

「此処じゃなんだから廊下で」

明久と雄二くんもこっそりと廊下に行ってしまいました。

「えー坂本君、クラス代表の君が最後です。前に出てきてください」

あの後も自己紹介は続いていき、雄二くんで最後です。

「了解」

「Fクラス代表の坂本雄二だ。代表でも坂本でも好きなように呼んでくれ」

「さて、皆に一つ聞きたい」

そう言うと雄二くんは教室に視線を移していきます。

みんなの視線も自然とそれを追っていますね。

すき間風が通る教室。

古く、うす汚れた座布団。

汚れて脚もガタガタな卓袱台。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしい

が……」

「……不満はないか？」

『『『大有りじゃあッ！！！』』』

魂からの叫びですね。

「だろう？俺だってこの現状に不満を抱いている」

『いくら学費が安いからってこの設備はあんまりだ！』

『Ａクラスだって同じ学費だろ！？』

『改善を要求する！！』

「そこで代表としての提案だが、Ｆクラスはクラスに対し試験召喚戦争を仕掛けようと思う！」

こんな早い試験召喚戦争は私が観てきた中では初めてですね。

第三話（後書き）

次回は勝てる要素を発表します。

明久の成績が！？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3171z/

バカとテストと召喚獣～僕の家族は幽霊！？～

2011年12月17日08時42分発行